

「ぶんぶんひろば」における授業の実践
セミナーⅠ
【赤ちゃんふれあい体験】
(保育学科)

Ⅰ 目的

保育学科1年生が、「保育の心理学」の授業の一環として、6月7日、14日に「赤ちゃんふれあい体験」を実施した。1年生は秋の教育実習まで、乳幼児を観察したり、触れあったりする機会がない。そこで、学内の子育て支援の広場に遊びに来られるご家族の協力を得て、乳幼児と直接触れ合い、乳幼児のことを理解できる機会を設けた。さらに、お母さん方に子育ての楽しさや大変さなどを教えていただくことも重要な目的とした。

Ⅱ 方法

1. 事前学習

1) 「保育の心理学」の授業であるため胎児期からの人間の発達についての道筋を丁寧に説明する。親子の愛着関係の形成、基本的信頼感の獲得等の理論なども、特に重視して話をし、学生の知識を深められるようにする。

2) お母さん方への質問内容をグループで意見を出し合い、考える。質問内容によってはお母さん方に対して失礼となったり、心を傷つけてしまったりする可能性があることを十分に意識して質問を検討する。

2. ふれあい体験当日

4～5人が1つのチームとなり、参加の6家族(お母さんと赤ちゃん)にインタビューをする。子育ての楽しさや大変さなど、様々な親の思いをリアルに聞かせていただく機会とする。赤ちゃんの表情やしぐさなど、すぐ傍で観察し、その感情の動きを感じ取る。

3. 事後学習

ふれあい体験後には、体験を振り返り、思ったことや気づいたことなどを発表し合い、皆で共有する。また、記録にまとめ、教科書を読むだけではわからない生きた学びの体験を整理して自分のものとする。

Ⅲ 結果

1. 写真記録より

写真に見られるように、学生たちは熱心にお母さん方と赤ちゃんたちにかかわった。



写真1 「ぶんぶんひろばの保育士スタッフから、日頃の活動について説明を聞き、学びました」



写真2 「とっても可愛い笑顔だね!」



写真3 「赤ちゃんって、やわらかくていい匂いで、本当にいいおいしい」



写真4 「いろいろなことに興味があるね」



写真7 「お母さんが見守ってくださっていると、赤ちゃんも安心しているね」



写真5 「子育ての大変さも楽しさも、たくさん教えていただきました！」



写真8 「気に入ったものには、とっても集中して遊べるね」



写真6 「赤ちゃんって、好奇心旺盛なんだね」



写真9 「こうやって抱っこしてよいかなあ」



写真10 「輪投げ、一緒にしてみようね～」

2. 学生の感想より（抜粋）

子育てをすることは、大変なことがたくさんあるのだと思いました。「自分のしたいことができなかったり、子ども優先になってしまったりするので大変だ」と言われた方が多くいらっしゃいました。離乳食を作っても、嫌いで食べなくて、捨ててしまうこともよくあって、これも大変なことの一つであるようでした。子どもが食べてくれるものをつくることも、このように大変なことなのだと知りました。

赤ちゃんに触れ合ってみて、本当にそれぞれ遊び方も違っていました。また、人見知りの子だったり、人見知りはありません子だったり、接し方も変わってくるし、何をしたら喜んだり笑ったりしてくれるのかなど、まだまだ分からないことが多く、接し方も難しいので、これから勉強していこうと思いました。また、子どもに癒される時は、全員のお母さんたちが「子どもの笑顔を見た時」と言われ、子どもの笑顔は大事であるとあらためて知ることができました。子どもの無邪気な笑顔は本当に素晴らしいし、実習に行くことがとても楽しみになりました。

「大きくなったらどんな子に育ってほしいですか」という質問をしました。どのお母さんも、人に迷惑をかけない程度にのびのびと、自己肯定感が高く育ってほしい、自分の好きなことができるように育ってほしい、と答えてくださいました。決まったことにとらわれず、自信を持って成長するのはとても良いことだと思いました。あとは、人に優しくできる人になってほしいとおっしゃっていたことも印象に残りました。

保育者に求めるポイントも聞きました。ベテランの保育士、新人の保育士に関わらず、自分の子どもを愛してくれる保育者や、技術や知識も大切だけど、それ以上に子どもと向き合ってくれる保育者、成長と一緒に喜んでくれる保育者に、保育してもらいたいとおっしゃっていました。経験数ではベテランの保育士さんには負けてしまうけど、一生懸命頑張っていれば保護者の方に伝わるということが分かりました。卒業後、保育士として働く時に大切にしていきたいです。

初めてぶんぶんひろばで子どもたちとふれあいましたが、改めて、私は子どもが好きだし、保育者になりたいという思いが強いことに気づきました。将来、保育者になるために、正しい知識と技術を学びたいです。

どんな悩みを抱えていて、それに対してお母さんがどういった気持ちでどういった対応をしているのかをたくさん学べました。保育士になってお母さんに悩み相談をされることも多いと思いますが、今回学んだことを活かして、お母さんの心の支えになれる保育士になりたいなと思いました。

IV 考察

1. 乳児の発達を知る視点

乳児の月齢、年齢によって、玩具とのかかわり方にも違いが見られることなど、目の前の赤ちゃんの姿から学ぶことができていた。抱っこする時の赤ちゃんとの距離感、自分の姿勢の調整、目の合わせ方など、言葉では説明しきれないことを、学生たちは体を通して知ることができた。

2. 母子の関係性への着目

エリクソンは、乳児期の発達課題は「基本的信頼感の獲得」であるとしている。つまり、母子の愛着関係の形成が、人間の成長発達の基盤となるという考え方である。このため、保育者は母子の関係性の発展を支えていく役割を果たすことが重要である。D. ウィニコットは、「一人の赤ちゃんというものはいない。いるのは、母親と一緒の赤ちゃんである」と述べている。保育を学ぶ学生は、「子ども」のみを単独で見る視点ではなく、常に「母と子」という関係性を通しての「子ども」を見る視点を養っていく経験が欠かせないと考え

る。そのようなことから、今回の赤ちゃんふれあい体験は、意義深い経験となったと言えよう。

3. 子育て支援の観点

1) 学生の学び

昨今では、保育者に求められる「子育て支援」の役割は大変大きくなっている。しかし、育児中の母親の抱える悩み・苦しみは複雑であり、その内面に寄り添うことは簡単なことではない。そうした現状を考慮しても、直接インタビューして得られたお母さんたちの率直な思いは、学生たちの心に響き、保育者としてあるべき道しるべを見出すきっかけとなったことが感想からも読み取れる。

2) お母さんたちの思い

ご協力くださったお母さんたちにも、感想をおたずねしたところ、「我が子が初めて出会う学生

さんたちに見せる反応が興味深かった」、「子育てにまつわる思いをしっかりと聞いてもらうことができ、何かすっきりした」、「学生さんたちから、かわいい、かわいいと言ってもらうことで、子育ての楽しさを思い出した」などの思いが語られた。子育て中の母親にとっても、今回のような学生たちとのふれあい体験は、新たな感情をもたらすものになり得ることもわかった。

V 今後の課題

赤ちゃんふれあい体験での学びが深まっていくよう、1年後期、2年前期、2年後期などにも入れていくことを検討し、提案していきたい。そのことにより、子育て支援の場としての役割も一層果たしていくことを目指したい。

(文責：保育学科 末次絵里子)